

竹林文庫の記録文書類、ついに公開

—— 竹林熊彦文書と田中稻城文書 ——

同志社大学図書館の輝かしき時代

今では知るひともしなくなりりましたが、同志社大学は図書館学教育において、誇るべき歴史と伝統を有する大学でありました。そして、図書館学が学問として確立する以前から、その発展と基盤づくりに努めた人々を輩出してきたのです。京都府立図書館長を務めた湯浅吉郎ゆあさきちろう〔湯浅半月ゆあさはんげつ〕(1858-1943)、図書館学の先達・竹林熊彦たけのくまひこ(1888-1960)、二人の衣鉢を継いで『日本文庫史』を著した小野則秋おののりあき(1906-1987)らは、関係者であればすぐに思い浮かぶところでしょう。



小野則秋

湯浅半月

戦前の1941年には、図書館学普及と図書館員養成を目的に、同志社大学図書館学研究会が発足しました。それから終戦までの4年間、戦時中にもかかわらず開催された研究会は、38回という驚嘆すべき回数にのぼります。熱心に研究・啓蒙活動の実践が重ねられた当時の同志社大学には、図書館への情熱と信念にみちた人々が集っていたことがわかります。

こうした活動の蓄積があったからこそ、戦後まもない1946年、同志社大学は全国に先駆けて図書館学講習所を設け、図書館学講習会を開催することができました。これは、一私立教育機関が開催した図書館学講習会の嚆矢こうしとなる快挙でありました。この同志社大学図書館学講習所と同講習会は、既に多くの識者から歴史的評価を受け、本学司書課程に脈々と受け継がれているのです。

今号では、先にふれた図書館学の先達・竹林熊彦の収集資料である竹林文庫の整理完了を機に、図書館界に貢献した

この学者の足跡と竹林文庫の概要を皆さんに紹介したいと思えます。

竹林熊彦の業績

まず最初に、竹林熊彦の略歴と業績を記しておきましょう。竹林は、1910年に同志社専門学校を卒業し、京都帝国大学文科大学史学科に学びました。その後、同志社大学予科教授を務め、1925年には九州帝国大学司書官、1939年には京都帝国大学司書官となりました。図書館学教育の高揚を迎えた戦後は、天理大学や同志社大学の講師を務めながら、晩年まで全力で啓蒙活動に邁進したのです。

また、彼が学界に発表した二百編を超える論考は、当時図書館界の最先端をゆく業績であったと評価されています。図書館界に大きな足跡を刻む“同志社が生んだ図書館人”と呼ばれるのも、むべなることでありましょう。

1950年の同志社大学図書館学講習会にて、竹林の講筵こうえんに列した受講生は、「いちばん印象深い先生でした。非常に熱のこもった面白い授業で、もともと赤ら顔の先生が熱心な講義でよけい赤くなりました」と当時を回想しています。図書館学の発展に粉骨砕身した“闘士”ぶりを彷彿とさせるエピソードです。

竹林の研究分野は広汎多岐にわたりましたが、本領は日本近代図書館史の研究でした。今出川図書館に残る自筆稿本『明治時代に於ける図書館の歴史的研究史料』などは、図書館史資料を渉獵した彼の情熱を物語ってあまりある資料で、この研究で帝国学士院の研究助成を受ける栄誉に浴しました。主著である『近世日本文庫史』(大雅堂、1943)は、日本図書館協会の「復刻図書館学古典資料集」の1冊として1978年に復刻されています。

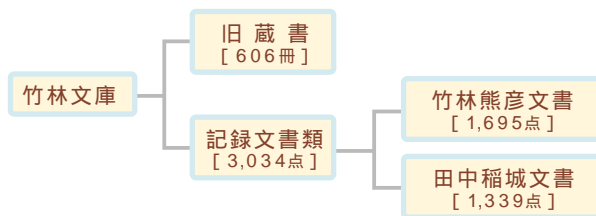


竹林熊彦

竹林文庫の来歴と内容

竹林熊彦は1960年に亡くなりましたが、その翌年、ご遺族の竹林春彦氏から旧蔵資料が寄贈されました。これが、現在竹林文庫と呼ばれるコレクションです。寄贈資料は、竹林旧蔵書と 竹林収集の記録文書類に分かれています。このうち、旧蔵書については直後に整理が終わり、利用に供されてきました。しかし、記録文書類は図書館で整理するのが難しい資料であることから、永きにわたって未整理のままとなっていました。

竹林文庫階層図



ところがこの間、学外の方々から閲覧を希望する声が多く寄せられていました。図書館では要望にこたえるため、2003・2004年の2か年の作業計画を立て整理作業を進めました。その結果、寄贈後40年あまりの歳月を経て、ようやく整理完了を迎え、2005年4月から公開の運びとなったのです。

さて、竹林文庫の記録文書類は全3,034点を数えますが、2つの資料グループから構成されます。ひとつは、竹林熊彦自身の草稿類を中心とする竹林熊彦文書1,695点、もうひとつは彼が研究対象とした初代帝国図書館長・田中稲城たなかいなぎに関する田中稲城文書1,339点です。



竹林の自筆手稿とスクラップ

まず、竹林熊彦文書を紹介しましょう。これは、全国各地で開催された図書館講習会及び講義等の下原稿作成のた

め、竹林が新聞や図書・雑誌から抜き書きした手稿を中心とした資料群となっています。また、日本各地から収集・寄贈された館報や出版物等、当時の図書館活動がわかるものも多数残されています。

残念ながら、これらの中に竹林熊彦の人物像をうかがえる個人的な資料、つまり、書簡や日記の類はほとんど存在しません。しかし、図書館学の普及と後進の指導に奔走した彼の軌跡をたどれる資料が十分に詰まっています。

特筆すべき田中稲城文書

もうひとつの特筆すべき資料は、田中稲城文書です。これは日本の図書館界にとって非常に重要な記録文書といえます。竹林が近代日本の図書館を築いた人々を研究する一環として田中稲城の事跡を調査した際に、田中家より寄贈されたと推測されるものです。

ここで、田中稲城について紹介しておきましょう。

田中稲城(1856~1925)は、初代帝国図書館長・初代日本文庫協会(現・日本図書館協会)会長を務めた人物で、わが国図書館界の大恩人であり、「図書館の父」と呼んでも差しつかえはありません。



田中稲城

田中は、近代図書館の黎明期、図書館学では初の文部省派遣海外留学生として、1888(明治21)年から1年半にわたり欧米で学びました。そして、帰国後は東京図書館長に就任、国立図書館の必要性を建議し、外山正一とやままさかず貴族院議員らをかたして、1897(明治30)年の帝国図書館設立に多大なる功績を残しました。

のみならず、早くより図書館員の専門性を訴え、日本文庫

協会設立に参画し、図書館経営と図書館学の確立に努めました。換言すれば、一国の文化制度として図書館のグランドデザインを描き、図書館運動の発展に生涯を捧げた先覚者なのです。

この中には帝国図書館設立案をはじめとした、近代日本図書館の成立過程がわかる田中の草稿・構想メモ類が存在していました。そして図書館関係者、諸友からの書簡なども数多く、差出人には穂積陳重、井上哲次郎、加藤弘之、加藤高明、牧野伸顕、外山正一、狩野亨吉等、近代日本の礎を築いた人物の名が連なります。

また欧米留学関係資料では、「ハーバード大学図書館二付報告」、「ウースター図書館の記・プロヴィデンス図書館の記」等の報告書原稿があります。日本に近代的な図書館を移入する際、どのような事項を海外で学んできたのかを資料からうかがい知ることができます。主な訪問先は、ハーバード大学図書館、米国議会図書館、大英博物館、仏・独の国立王立図書館でした。



帝国図書館設立関係の草稿類

竹林熊彦は、これをもとに「田中稲城 人と業績」(『図書館雑誌』第36巻3号、昭和17年)・「田中稲城著作集」(『図書館雑誌』第36巻6号・7号・9号、昭和17年)、『近世日本文庫史』(大雅堂、昭和18年)等を発表します。それ以来、これらの資料は竹林のもとで保存され、彼の没後は今出川図書館の片隅に眠ることになったのです。

田中が心血を注ぎ、朱筆で推敲を重ねた「帝国図書館設立ノ議」等の草稿類や構想メモ類は、いまなお史的価値は非常に高いといえましょう。それらは、国民全般への文化普及のために、田中が国立図書館の必要性と設立の急務を訴えたプロセスを詳らかにしてくれます。

しかし、帝国図書館成立には、険しい道のりがありました。

田中の記録文書からは、周囲の無理解と軋轢に苦しみながら、難産の末に開館した帝国図書館の裏面史が雄弁に語られます。例えば、日露戦争や物価上昇による財政不足のために、最終的に当初予定の四分の一しか建築されず、不本意な開館を迎えた無念さを吐露した「開館式々辞」原稿は胸をうちます。

このように田中稲城文書は、わが国近代図書館成立期の「証言者」たる資料群であり、図書館思想と図書館運動の地下水脈を辿るための資料の宝庫なのです。

これらの資料は、おそらく図書館学の確立と発展に執念を燃やしていた竹林を鼓舞してくれるものであったに違いありません。そして、竹林は自らの奮闘努力を、先駆者の田中稲城の闘う姿に重ね合わせていたと推測するのは、深読み過ぎるでしょうか。



竹林文庫文書記録類の全景

公開の意義について

同志社大学竹林文庫は、竹林熊彦が研究対象とした田中稲城文書をはじめとする資料、それらをもとに竹林自身が生み出した成果物の両方が存在しています。文庫内のオリジナル草稿と竹林熊彦の著作物を対比し、研究成果を検証できる貴重なコレクションといえるでしょう。

今回の整理では、閲覧者の便宜も考慮して、1点ごとの資料記述を付した目録を作成し、年譜や書簡差出人一覧表などの参考資料も加えることができました。

この度の公開で、図書館活動の歩みに新たな光が照射され、図書館史研究の進展に貢献できれば、同志社大学としてこれ以上の喜びはありません。そして、竹林熊彦と田中稲城を顕彰する機会、図書館学における同志社の伝統を再認識する機会となればと祈念するところです。